

令和4年度 総務厚生常任委員会行政視察報告書

1 視察日 令和4年7月12日(火)から14日(木)まで

2 視察地

北海道七飯町（面積 216.75 km²、人口約 28100 人）

・子育て施策について

北海道ニセコ町（面積 197.13 km²、人口約 5000 人）

・移住定住・創業支援について

北海道留寿都村（面積 119.84 km²、人口約 1900 人）

・子育て施策について、複合施設見学

3 参加者	委員長	高瀬	由子
	副委員長	掛下	法示
	委員	藤田	欽哉
	委員	佐貫	薫
	委員	小林	勇治
	委員	宮本	妙子
	委員	石井	侑男
	委員	中村	久信
	執行部	水沼	宏朗（子ども課副主幹）
	随行	佐藤	晶昭（議会事務局主査）



4 視察概要

(1) 北海道七飯町 [7月12日(火)13:30~15:00]

<矢板市の現状と視察目的>

矢板市では、平成27年「第一期矢板市子ども・子育て支援事業計画」に基づき、教育・保育や子育て支援についての関心や理解を深め、それぞれが協働しながら各々の役割を果たしていくまちづくりを目指しました。令和2年度は、子育てにおける現状や課題を踏まえ「第2期矢板市子ども・子育て支援事業計画」を策定しました。職員が熱心に各事業に取り組んではいるものの、すべてが効果的に運用されている状態とは言えません。地域への働きかけ、周知方法など改善の余地があります。七飯町の先進的取組を市政に生かしていくために視察しました。

<視察内容>

函館市、北斗市などに隣接する七飯町では「住むなら七飯町」をキャッチコピーとして、子育て施策の充実、学校や道の駅「なないろ・ななえ」施設の新築と住宅地の造成などに注力しております。

病児保育事業、ファミリー・サポートセンター事業、子育て短期支援事業を3つの柱に掲げ、子育て支援の充実を図っています。妊娠から、出産、子育てまでをフルサポートする、母子



手帳アプリ「子育てアプリななっぷる」は、女性向け健康管理アプリ「ルナルナ」の利用者の声に応じて生まれたサービスで、予防接種日の管理、地域の育児情報、施設の検索、子供の成長の記録と家族間共有等、子育てに役立つ機能を有する便利なツールで、市ホームページを通じて広報しております。

「重層的支援体制整備事業」により、保育所や保育園に併設された子育て支援センターでは「あそびの広場」「スマイル広場」「あそんで SUNDAY パパ」「サークル支援」等、魅力的な施策を推進しております。

保育所児童保育要録「りんごっこカード」には、子どもの育ち、養護、教育に関わる事項が細分化されており、得意なこと、好きなこと、特長、特記事項の欄もあり、保育所から小学校への引き継ぎが、スムーズにできるよう配慮されています。

これらの施策の結果、令和元年から令和3年まで、転入が転出を上回り、その差はそれぞれ、106名、171名、254名と増加しております。

りんごっこカード (七飯町保育所児童保育要録)

ふりがな	姓 学 先	七飯町立大中山小学校
名前	保 育 所 名	七飯町立大中山保育所(園)
	保 育 所 住 所	七飯町大中山3丁目288番地2
	保 育 所 電 話 番 号	0138-65-2343
(平成 年 月 日生) 男・女	在 所 期 間	平成28年4月1日～平成30年3月31日 2年 0ヶ月
子どもの育ちに関わる事項		得意なこと、好きなこと、集中してできること、良さ、特長
養護に関わる事項	食 事	・一定の時間内に食べる() ・好き嫌いをなく食べる() ・こぼさない() ・食事の量(多い 普通 少ない) ・はしを上手に使う() ・歯磨きができる()
	排 泄	・排泄にかかわる動作ができる(自分でできる 教えられなくてもできる できない) ・和式、洋式どちらのトイレでも使える(和式のみ 洋式のみ 両方) ・トイレの間隔(長いほう 普通 短いほう) ・その他()
	健 康 状 態	
教育(発達援助)に関わる事項	かかわり 運動・ことば 学習	・友だちと仲良く遊べる() ・発音などの問題がない() ・友達を誘って遊べる() ・積極的に日常会話する() ・遊具を順番に使う() ・絵を描くことができる() ・砂、どろんこ遊びができる() ・はさみやのりが使える() ・元氣よくあいさつ、返事ができる() ・10くらいまで数えられる() ・高い遊具(鉄棒など)で遊べる() ・静かに待つことができる() ・一定程度長く歩ける() ・ボールを投げたり受けたりできる() ・走ったり跳んだりできる() ・予定の変更を受け入れられる()
	特記事項	上記以外で小学校へ伝えたいことがあれば、ご自由に記入下さい。
小学校記入欄		
施設長名	担当保育士名	

()内は、普通程度は空欄とし、特徴的な点を◎や△で記入する。該当しない、判断つかないなどは、△とす。

<矢板市への展望>

近隣市より職場が少なく、土地単価が安価である矢板市と同環境である七飯町に学ぶところは多く、職場がなくても子育て施策を充実すれば、若い世代の移住定住を望めるという好例でありました。

矢板市は、公式ウェブサイト「子育てポータルサイト」や公式アプリ「やいたぶ」がありますが、「ななっぷる」のような母子手帳の代わりとなるアプリを導入すれば、子どもの体調管理、栄養管理が長期的に可能になるだけでなく、子育て相談と情報共有などが容易にでき、近くに相談相手のいない核家族にとって心強いサポートとなります。母親目線、父親目線での施策を推進、周知させ、移住定住促進に繋げていただきたいと思います。

(2) 北海道ニセコ町〔7月13日(水)14:30~16:30〕

＜矢板市の現状と視察目的＞

矢板市では、人口減少や少子高齢化の進行など、市政を取り巻く状況の変化や厳しい財政状況が見込まれる中で、より良いまちづくりを着実に行的っていくため、令和3年度から令和7年度までを計画期間とする「やいた創生未来プラン」を策定しました。

「安定した雇用をつくとともに、安心して働けるようにする」を基本目標の1に掲げ、「創業支援等事業計画」を策定し、矢板市商工会と連携しながら、創業塾、創業希望者交流サロン、創業サポートアカデミー等を開催しています。

また「来てもらふ、住んでもらふ、新しい人の流れをつくる」を基本目標の2に掲げ、UIJターンによる移住・定住の促進のために様々な支援を行っています。しかしながら、開催、周知などの方法に改善の余地がありそうです。

創業支援も含めて先進的な移住施策を展開し、人口増となっているニセコ町に学ぶべきところは数多くあります。今年度は「いちご一会とちぎ国体」で人流れが増加する大切な年でもあるので、ご教授いただいた内容をスピード感を持って矢板市政に生かしていくべく、視察いたしました。

<視察内容>



全国で初めて「町の憲法」といわれる自治基本条例「まちづくり基本条例」を制定した、ニセコ町は「住むことが誇りに思えるまちづくり」を基本構想に「暮らしやすさが実感できる、元気とやすら

ぎのあるまちづくり」を推進しており、「ニセコ町まちづくり基本条例」の中で「情報共有」と「住民参加」をまちづくりの2大原則としております。

情報共有としては、30年前の町長からの指導により「資料は30秒で、すべて公開」し、住民向けにわかりやすい予算書「もっと知りたいことしの仕事」を配布しています。これは各種講義などでも「理想の予算書」として取り上げられ、販売されています。同時に、課題提示型広報誌「広報ニセコ」、公式ウェブサイト、コミュニティFM、Twitter、Facebook、LINE等メディアミックスによる効果的な情報発信を行っております。



住民参加としては、公募委員を含む「まちづくり委員会」事業ごとの「住民検討会議」、条例制定、改廃時の「住民参

加義務付け」、住民自らの事業企画、運営、町民投票制度などに取り組んでおります。更に「子どもにやさしいまちづくり」を推進し、未成年者の住民参加として「小中学生まちづくり委員会」「子ども議会」にも取り組んでいます。また「議決前に町民の意見を聞く」「5 人集まれば町長が出向く」そうで「こんにちは(おぼんです)町長室」「まちづくり町民講座」「まちづくりトーク」「まちづくり講演会」などが開催されています。これらの取組を支えるために町職員「まちづくり専門スタッフ」の育成として、インターンシップの受入れ、研究会や学会への参加による様々な連携、横断的な職務遂行、職員プロジェクトチームによる活動を通じて「自ら考え行動できる職員」「自律して町民と共に歩む職員・組織づくり」を目指しています。

移住定住施策としては、ニセコ町移住希望者向けサイト「ニセコ町移住ポータル」を立ち上げ、更には交流施設「ニセコ中央倉庫群」の旧でんぷん工場に移住定住窓口を設置しています。その交流施設は、無料 Wi-Fi が使用できるフリースペースで、カフェ、キッズスペース、授乳室を備えた、観光の途中に気軽に立ち寄れる場所となっています。ニセコ町は世界に誇るパウダースノーの町として有名で、定住外国人の増加に伴い、平成 24 年に北海道インターナショナルスクールニセコ校が開校しました。これは「第 4 次ニセコ町

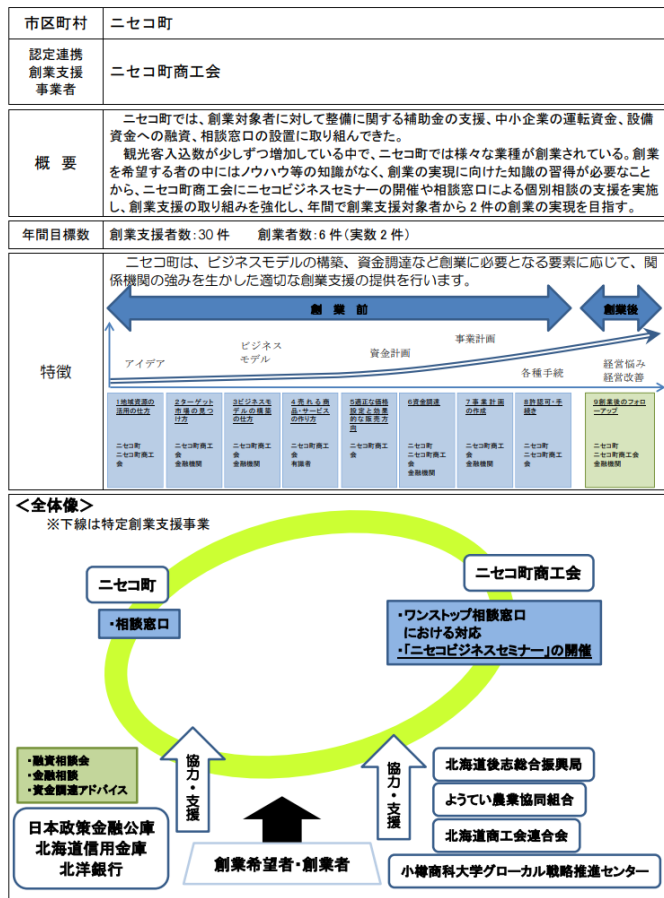


総合計画」における、これからの姿とする「小さな世界都市ニセコ」に基づき、働きやすく定住しやすい環境を提供し、外に対して常にオープンに国際交流の新たな展開を創造してきたことによります。これにより、多様性のある学級編成が可能になり、外国人だけでなく、英語教育を重視する日本人の定住も加速することになりました。

これらを効果的に発信することで、移住定住が進み、5年に1度の国勢調査において2015年から2020年の人口増加率は2.3%で北海道内第5位、2020年まで、4期連続20年間人口が増加しております、5年間で約250人の移住がありました。2021年には「15歳未満の年少人口」増加が北海道で首位となりました。

現在、町役場職員の約7割が移住者であり、新卒採用より社会人経験者採用の方が多いそうです。このことにより、各地





の施策、各企業のノウハウが自然淘汰され、理想の施策展開が可能になったと考えられます。また地域おこし協力隊の約7割が定住しているそうです。

町全体が「おもてなし」を前面に出し、観光客が、リピーターになり移住者となっていく良い循環が生まれています。町としても移住定着率を上げるために、北海道と連携した「しりべし『まち・ひと・しごと』マッチングプラン」と「就職支援」「創業支援」として

ニセコ町商工会に「ワンストップ相談窓口」を設け「ビジネスセミナー」を開催しています。更に北海道後志総合振興局、ようてい農業協同組合、北海道商工会連合会、小樽商科大学グローバル戦略推進センターなどが協力・支援にあたり、金融機関が資金調達アドバイス・金融相談をすることで「一過性にならない取組」を継続しています。2021年には起業者が9件となり「新設法人が大きく増えた町・村」で



全国 6 位になっております。移住者を温かく応援することで、移住者にも「恩返し」の心が芽生えるといいます。また地域の温かい目により「一人ひとりが主役になれる」まちを目指しているようで、住民も移住者も協働し、町に誇りをもって生活しているのを肌で感じました。



<矢板市への展望>

ニセコ町では、「移住定住」案内の中に創業支援の案内も含まれ、安心して移住できるように配慮されています。

矢板市では、「YAITURN」の中で「出会ったことのないまち、矢板」として市の利点や観光案内、従業員の声と就職に関する相談窓口を掲載していますが、様々な施策や移住者の声も記載すると同時に SNS 発信して移住が促進されるよう取り組んでいただきたいと思います。

「暮らしやすさ」を実感して定住していただくには、「一人ひとりが尊重される」場づくりも大切です。矢板市には、移住者である行政区長が、革新的な施策を展開している行政区も複数あります。移住定住促進のためには、それらを周知させ、市民はもとより職員がまちに愛着を持ち、個々が本領を発揮できる環境づくりと、柔軟な思考、横断的な「おもてなし」対応が必須であると痛感しています。

(3) 北海道留寿都村（るすつ子どもセンターぽっけ）

〔7月14日(木) 9:00~10:30〕

<矢板市の現状と視察目的>

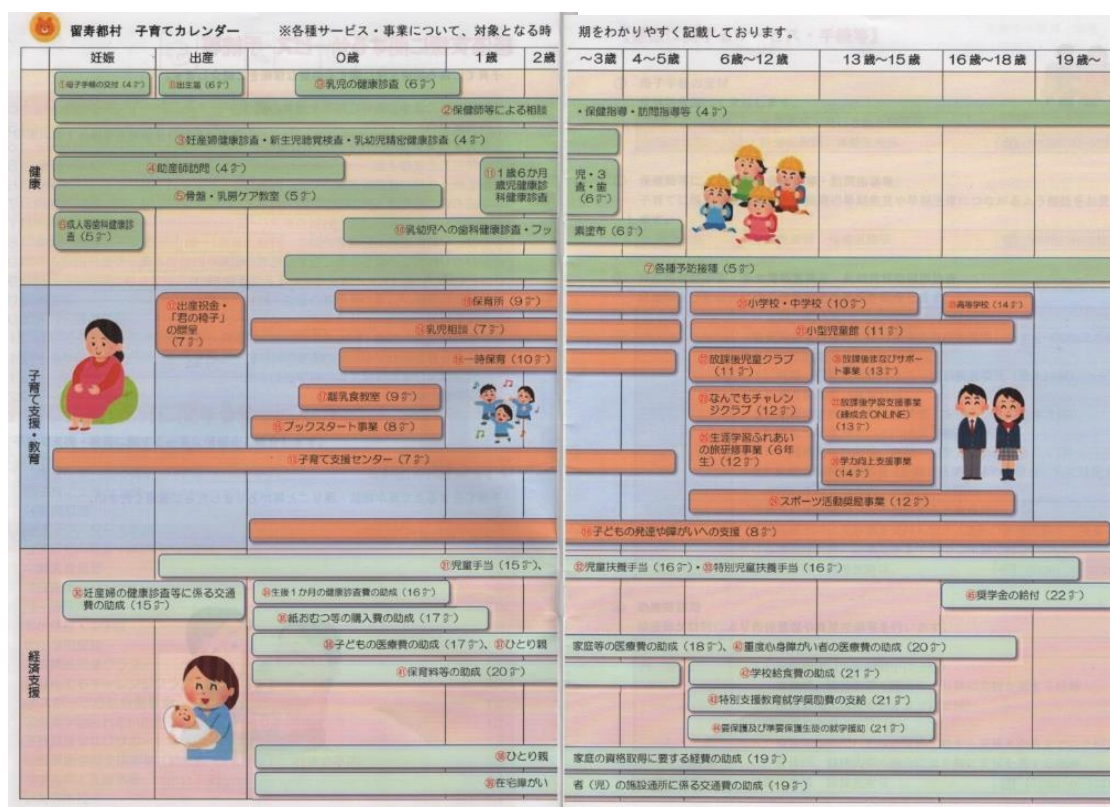
矢板市では、平成27年「第一期矢板市子ども・子育て支援事業計画」に基づき、教育・保育や子育て支援についての関心や理解を深め、それぞれが協働しながら各々の役割を果たしていくまちづくりを目指しました。令和2年度は、子育てにおける現状や課題を踏まえ「第2期矢板市子ども・子育て支援事業計画」を策定しました。

矢板市の子育て支援センター「イケポス池田キッズハウス」や閉校後の施設利用の参考にするため、村独自の様々な子育て施策を展開している留寿都村の子育て支援複合施設を視察しました。

<視察内容>

留寿都村は「暮らしを楽しむ村」として子育て施策を重視し、出産祝い金・「君の椅子」の贈呈、スポーツ活動奨励事業、生涯学習ふれあいの旅研修事業、放課後まなびサポート事業、放課後学習支援事業などの教育事業、生後1か月の健康診査費用や紙おむつ等の購入費の助成、障がい者(児)の施設通所に係る交通費の助成のほか、経済支援事業など、村独自の事業を行っています。

「留寿都村子育て応援ガイドブック」は、対象となる 18 歳までを時系列で項目別一覧表にして掲載するなど、大変分かりやすく工夫されており、村が子ども達を大切にして応援していることが伝わってきます。



「るすつ子どもセンターぽっけ」は、保育所、子育て支援センター、放課後児童クラブ、小型児童館を備えた複合施設



で、地域共生型の児童福祉中核施設として、就学前から就学後まで一貫して児童の成長等を把握しやすい環境整備を図り、建設コスト圧縮を目指した建築物です。木のぬくもりの中で子ども達の成長を

継続して温かく見守り、指導できる施設で、子育て支援センターは児童や保護者だけでなく、出産前の方、子育てに興味のある方、祖父母の方など幅広い年代の方が利用できる多世代交流の場です。

<矢板市への展望>

矢板市でも「子育て応援ガイドブック」を発行しておりますが、小学生までの応援しか記載されておられません。是非「留寿都村子育て応援ガイドブック」を参考にして更なる利便性を図り、ガイドブックを手にした方が「市から大切に思われ応援してもらっている」と実感できるように改良していただきたいと思います。

矢板市の「イケボス池田キッズハウス」においては、利用対象が赤ちゃんから18歳までとなっており、「るすつ子どもセンターぽっけ」のように柔軟な対応による多世代交流を増やしていくべきと考えます。また泉中学校閉校後に子育て支援と福祉関係の複合施設を整備することになっていますが、こちらは多世代交流が可能な場となりますので、「ぽっけ」の良いところを取り入れ、複数の優良施設を視察していただき、利用者目線の施設創設を要望いたします。



5 総括

「お金じゃないんだな」これは複数の委員のつぶやきです。移住定住促進事業として矢板市の「暮らしのびのび定住促進補助金」施策も有効な手段ではありますが、「住むのにお勧めなまち」「一人ひとりが主役になれるおもてなしのまち」「暮らしを楽しむ村」での視察は、「お金で買えないもの」「目に見えないもの」「その地に生きる意味」の大切さを実感した3日間となりました。

子育て支援、暮らしやすさは移住定住の大きなポイントであり、人口減少・少子高齢化対策において「子育て世代が選んでくれるまちづくり」は欠かせない視点となります。関係人口、交流人口が、移住定住人口となる可能性を秘めています。視察先の施策を参考に矢板市が「選ばれるまち」になるよう取り組んでいただくことを切望して、報告を終わります。